

山と博物館

第36巻 第10号 1991年10月25日 大町山岳博物館

特集 山岳博物館 40年の歩み展



昭和57年6月5日 三代目博物館落成式

山岳博物館 開館40周年にあたって

11月1日、山岳博物館は開館40周年を迎える。

大町山岳博物館は戦後の混沌としていた時代に、故郷を愛する地域の青年たちは強く文化を求め山岳博物館の創立運動に全精力を傾注した。ある時は遊説隊が街頭に立ち、またある時は町民大会(当時は町であった)を開催し、博物館の必要性を説いた。その熱意と献身的な活動に賛同し尽力を惜しまなかった幾多の市民の努力の結果、当時の理事者の深い理解と支援により、昭和26年11月1日山岳博物館は開館したのであった。

それは奇しくも「博物館法」制定の年でもあった。

初代博物館は古い織維工場の講堂を改造したものであり、2代目は北アルプスが全貌で広がる通称大町公園の高台に旧制の中学校の校舎を移築したもので、いずれも古い建物が博物館として活用された。しかし、これらの建造物は老朽化が激しく様々な面で支障をきたし、早急に新館の建設が強く要望された。

要望されてから約10年、様々な紆余曲折を経て昭和57年6月5日念願であった新館が開館した。

また、調査研究面でも特別天然記念物のライチョウ、カモシカの野外調査、低地飼育実験を中心に各種の調査研究活動、「友の会」を中心とした教育普及活動など行われてきた。しかし、ここまで順調に進んできた訳ではない。30年代の地方財政再建特別措置法の準用を受けた折は博物館の存続が危ぶまれたが、博物館を生みだした市民の善意ある支援で何とか切り抜けることができた。40周年を迎えるにあたり創設当時の青年の心意気を忘れず、市民により一層親しまれる博物館として努力して行きたいと思っている。

目で見える山博40年の出来事

大町山岳博物館

はじめに

ここに掲載する写真は、企画展『山岳博物館40年の歩み展』に展示するものの一部である。年表形式の記述とともに足速に40年間の主な出来事を振り返り、記録にとどめたい。

(年数はすべて和暦)

昭和22年10月 郷土部の誕生

大町公民館に青年団の若者を中心とする郷土部が誕生した。郷土文化興隆の基地としての「山岳博物館」の設置を最高の目標に掲げ、設立運動に奔走した。

26年8月 オオハクチヨウ舎完成

24年1月、高瀬川で1羽のオオハクチヨウが保護された。郷土部は大町駅前に飼育舎の建設を主張、ついに民意を得て町当局を動かした。この問題をきっかけに、博物館設立の気運が高まる。

26年11月1日 山岳博物館開館

建物は改築した富国織維(会社)の講堂をあて、現在の神楽町公民館付近だった。「戦後の混乱に世をあげてまきこまれていくとき、大町の青年たちは強く文化を求めはじめておりました。」

公民館の青年部に芽ぐんだこの文化意志は、ついに博物館の設立へと結実され、昭和二十四年構想を終って資料の収集に研究にと奉仕的な活動が続けられました。

そして、この熱意の引き起した連鎖反応は市民一人一人の積極的な援助となって、大町は博物館建設に一九となり、(中略)博物館は開館されました。

28年7月 研究会発足

福岡孝之先生 沿革序文より
個々の研究とともに、10年後の文化運動の

担い手の育成を目的として発足した。発足時の入会者は一八〇名。山博創設から活躍した多くの人々が各分野で指導にあたった。

28年8月 イヌワシ飼育

志賀高原で保護され、付属動物園で飼育された。57年2月まで生存。また40年5月にも麓川で幼鳥が保護收容され、58年8月まで生存した。

31年2月 岳子入園

稲核村(現安曇村)で保護されたカモシカのメスの幼獣が入園した。山博への入園第1号となったこの白いカモシカは、一般公募によって「岳子」と命名され、21年あまりにわたって市民のアイドル的存在として親しまれた。

31年4月 居谷里湿原総合学術調査

北アルプス一帯を野外博物館として開設するため、基礎調査の5ヶ年計画が立案された。その予備調査として、居谷里調査が開始された。調査団は地元の研究者、館員を総動員して構成され、年間の出勤人員は延六〇〇人以上、収集資料は二六〇〇点あまりを数えた。現在、湿原は県の天然記念物に指定されている。

31年 二代目博物館建設

大町公園(現在の駐車場)への大町南高校の旧校舎の移築が行われた。11月に移築完了、翌年8月の開館を待つ。

31年 「白い山脈」の撮影

動物記録映画「アルプスの鷲異」(富士映画・後に「白い山脈」と改名)の撮影案内と指導にあたる。32年3月に完成し文部省特選となったが、記録とフィクションの問題で話題をまいた。

32年7月 博物館実習

鶴田総一郎先生の指導で、東京教育大(現筑波大)の学生を対象に博物館実習が行われた。中央と地方博物館の連携による新しい試みとして注目される。



28年 イヌワシ飼育



26年 初代博物館開館式



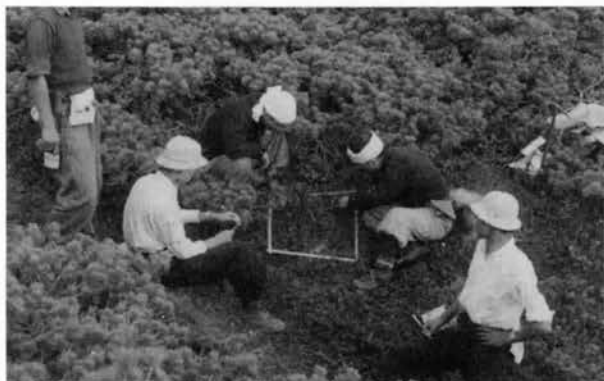
31年 「白い山脈」撮影



31年 居谷里湿原総合調査



31年 岳子入園



33年 針ノ木岳調査



32年 山の自然科学教室

32年7月 第1回山の自然科学教室
 東京教育大学野外研究同好会が、木崎夏期大学と八方尾根を根拠地に6日間、わたって実施。都内6中学校一二七名の生徒が参加。教育大・信大の教官のほか館員・調査員、教育大学生などが指導にあたった。41年まで10回継続された。

33年4月 針ノ木調査
 針ノ木自然園の開墾運動が進められ、信大教育学部生物学教室の協力を得て基礎調査が行われた。調査員43名、調査日数は延べ四四三日に及んだ。

35年 コマクサ園
 その生態と低地栽培の研究が長野県から委託されてロックガーデンを作って以来、コマクサは山博のシンボルのひとつとして根づいている。

35年8月 富士山にライチョウを放す
 日本鳥学会・林野庁が主体となり山博が協力して、白馬岳から7羽のライチョウが空輸され、富士山に移殖された。残念ながら繁殖の継続は確認できなかった。

36年3月 皇太子殿下ご来館
 3月27日、皇太子殿下(現天皇陛下)が来館され、館内の展示をはじめカモシカ、岳子”を親しくご覧になられた。

36年5月 ライチョウ調査はじまる
 信大教育学部のメンバーとともに爺ヶ岳でライチョウ調査が始められ、10月まで一五〇日連続して行われた。

36年6月15日
 高松宮様ご夫妻、秩父宮妃ご来館

36年 コブハクチョウの飼育
 皇居外苑保存協会から2羽のコブハクチョウを移入し、木崎湖畔海の口に白鳥の池を作って飼育をはじめた。39年には初めて3羽の雛が誕生。また40年には将来木崎湖を白鳥の湖にするという計画の下に、放し飼いの準備のため白鳥の池に隣接した湖畔に外柵が設けられた。

38年3月 冬期ライチョウ調査
 40日間にわたり、爺ヶ岳に職員3名他が常駐して行われた。陸上自衛隊・大町山の会が、物資の輸送・通信などのサポートに活躍した。

38年 ライチョウ飼育
 生態調査と並行して、低地でのライチョウ飼育の研究が開始された。44年、初の自然抱卵による孵化に成功したが数日間ではほとんどが死亡。以降気象条件や餌の改良、防疫の工夫を重ね、現在も国と県の補助を得て継続中である。

39年7月 爺ヶ岳でライチョウを飼う
 爺ヶ岳に移動禽舎を設置して、約1ヶ月にわたりメス親と3羽の雛を取容し家族群の生活状況、天敵との関係が調査された。

40年 秩父宮記念学術賞授賞
 創設以来の山に関する顕著な科学的業績が認められ、第2回学術賞を授与された。

40年6月 カモシカ人工哺育成功
 真田町からカモシカの幼獣を受け入れ人工哺育を行った。山博でのカモシカの人工哺育成功第一号であり、後に”大助”と命名されて14年あまりにわたって飼育された。

45年 カモシカ初繁殖
 5月29日早朝、”あつ子”が出産。31年にカモシカの飼育をはじめて以来14年目にして繁殖に成功した。

48年 日中交友カモシカ使節
 日中国交回復を記念して中国から日本にジャイアントパンダが贈られ、その返礼として日本からカモシカを贈ることになった。4月3日、上野動物園で検疫を終了した山博のカモシカ”太郎”と”辰子”は空路中国へ旅立った。当初中国行きが決まっていた”木曾生”が、大町から送り出される日を3日後に控えて、心無い観覧者に殴打されて右目を失明するという忘れがたいアクシデントもあった。



40年 秩父宮記念学術賞受賞



37年 冬期ライチョウ調査



36年 皇太子殿下と岳子



60年 マーモット入園



45年 カモシカ初繁殖

60年2月 友好提携調印
2月18日、インスブルックのアルペン動物園内のワイヤーブルク宮殿において、インスブルック市と大町市、アルペン動物園と大町山岳博物館のあいだで友好提携協定書

57年6月5日 三代目博物館落成式
11月5日、ウイーンのシェーンブルン動物園へカモシカの「大」と「博美」が成田空港へ出発した。不幸にも博美は機内で死亡した。このカモシカがきっかけとなって、大町市とインスブルック市、山博とアルペン動物園の友好提携が結ばれる。

56年 バンダとカモシカ展
日中国交回復記念として日本に贈られたジャイアントパンダ「ランラン」が死亡し、剝製となって多摩動物公園に保管された。パンダの交換使節として山博のカモシカが贈られた経緯から、ランランの一般公開第1号として4月22日から5月5日まで開催された。期間中の入場者は3万人を超える人気だった。

53年8月 友の会再発足
34年に研究会から改称した友の会の再活生を期して、8月12日には学生総会が、19日には一般総会が開かれ、一志茂樹先生の特別講演会も行われた。

53年 高瀬川自然総合追跡調査
高瀬川電源開発工事が完了し、高瀬・七倉両ダムが完成した。これらの周辺地域の環境変化に関する調査が3カ年継続して行われることになり、事務局が山博に置かれた。

51年 テレメーター実験
文化庁から日本自然保護協会が委託された事業の一環として、カモシカの生態を解明するためのテレメーター開発があった。山博はそのうちのテレメーター装着と電波実験を担当した。

60年4月 マーモット来る
友好提携をしたアルペン動物園から、アルプスマーモット4頭(オス・メス各2)がルツガー会長、ベヒラーナー動物園長らとともに日本に初めてやって来た。

平成3年10月13日
秋篠宮様が来館され、オオライチョウなど興味深く観察された。
平成3年11月1日 山博創設40周年

平成2年 シャモア来る
3月9日、アルペン動物園からの3番目の贈りものとしてシャモア(アルプスカモシカ)3頭(オス1、メス2)が、動物園のルツガー会長、ノイマイヤー友の会会長らとともにやって来た。

63年 ヒマラヤ展
7月16日から9月15日まで「ヒマラヤ」八〇〇m峰と日本登山隊が開催された。日本人による八〇〇m峰14座初登頂の資料、チョモランマ/サガルマタ三合同登山の資料を中心に第2展示室と2階ホールの全面に展示する大がかりな特別展だった。

62年5月 オオライチョウ孵化成功
山博で繁殖ができるようにと、61年5月ベヒラーナー園長がオオライチョウの卵を持参したが不成功に終わった。62年5月、園長の好意で再度孵化が試みられた。ドイツのライチョウ研究者アツシエンブレナー博士らが持参した9個の卵からはついにメスを含む4羽の雛が誕生し、繁殖が可能になった。

おわりに
40周年記念事業の一環として、記念誌「大町山岳博物館40年の歩み」と、単行本「カモシカ」及び「ライチョウ」(ともに信濃毎日新聞社刊)の出版を予定している。

山と博物館第36巻第10号
一九九一年十月二十五日発行
発行所 長野県大町市 TEL0267-2211
印刷所 大町山岳博物館
大町市 大町
定価 年額 一、三〇〇円(送料共(切手不可))
郵便振替口座番号(長野四一三三九九三)



平成3年10月 秋篠宮様ご来館



60年 オオライチョウ歓迎式